

村野次郎創刊

香蘭



二〇二五年(令和七年)十一月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

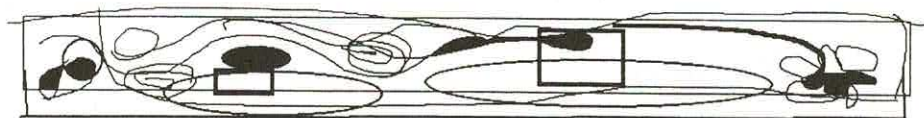
第一〇二卷第十一号

2025年(令和7年)11月号

第102卷

第11号

通卷1139号



香 蘭

2025年(令和7年)11月号
第102巻 第11号 通巻1139号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(123)	大賀 一 雅	表二
招待作品 奇数月連載⑬ そよぐ枯れ蘆	加藤 英 彦	2
作 品		4

一	23
二	29
三	36
推薦香蘭集	37

香 蘭 集	14
-------	----

作品一	十首選(九月号) 渡辺礼比子選	16
-----	-----------------	----

作品二・三	十首選(九月号) 千々和久幸選	18
-------	-----------------	----

村野次郎への旅(187) 昭和期の「香蘭」(二十二)	千々和久幸	21
----------------------------	-------	----

続・酔風船(23) 新聞にももの申す	鑑賞	22
--------------------	----	----

一頁公論(54)『鎌倉百人一首を歩く』	鑑賞	22
---------------------	----	----

エッセイ・自由研究 わが歌を振り返って	小野 香代子	40
---------------------	--------	----

焦 点(九月号) 梅雨・雨・紫陽花を詠んだ歌	石井 雅子	42
------------------------	-------	----

作 品 評(九月号)	作品一	44
------------	-----	----

	作品二	46
--	-----	----

	作品三	48
--	-----	----

香蘭集	平川 良枝	50
-----	-------	----

七 首 抄(九月号)	渡辺(君)・土井・有馬・矢口	52
------------	----------------	----

緑 地 帯	山下 紘正・木村 純・篠永 路子・富原 洋一	53
-------	------------------------	----

明宝研究会 第一六七回 八月例会 恋のうた、愛のうた	渡辺 礼比子	58
----------------------------	--------	----

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		66
--------------------	--	----

令和八年 新年本社歌会 参加申込書、詠草記入用紙		69
--------------------------	--	----

歌会及び会合・会員消息・他		72
---------------	--	----

編集後記・新宿日記		75
-----------	--	----

令和八年 新年本社歌会のご案内		表三
-----------------	--	----

表紙絵	山口 蓬春「桔梗」	和雄
-----	-----------	----

目次・緑地帯カット		和田
-----------	--	----

村野次郎作品 私の愛誦歌 (123)

一すじによみし生き様稚拙さの

中にあふれてなかなかよろし

『村野次郎歌集』

この歌は昭和三十三年、先生六十四歳の作である。小題「選歌」七首の四首目に置かれている。

「他人真似ではなく自身の生き方から滲み出る歌を」という指針が示されて、漫然と歌作を繰り返している私にはありがたい光となっている。つまり「選歌」の七首を鑑賞の対象としてより寧ろ歌詠みのノウハウとして受け止めているのである。六首目の〈目もあやによみはよみしがさかしらのすぎてまことに触るるは遠し〉も同じく、「技巧に傾き過ぎれば損ねる」との戒めである。とは言え、読者の目に留まる技巧も過ぎないほどには勉強すべし。

三首目〈常識の境を越えて奥所より湧き出る歌つねにあたらし〉から求められる遥かなる高みにいつかは近づきたいものである。

(『村野次郎全歌集』234頁『村野次郎歌集』)

そよぐ枯れ蘆

人まばらなる房総の遠浅に雨しぶくひかりの針がふる

海浜にしろき粒子は泡だちて引きぎわわるき足裏あうらを浚う

かつて王道楽土をうたう異土ありて幾百万のそよぐ枯れ蘆

あの海のむこうにゆけば肥沃なる土のひかりと渡満のさくら

わたしの何を護りくれしか牡性はわが体熱を舐り尽くしつ

いちまいの皿とり替えるようにして裏返されきと誰にもいえず

空が大きくゆがむたちまち山々のみどりが暗む、息ができない

なぜソ連兵ロシア兵に凭れたりしかなぜ八路軍八路軍や苦力こうべに頭をたれて詫びぬか

剥がされてゆくふとき掌てにひらかれて双のくるぶしに痛みがはしる

ゆうべ臥し処に鳴くかまどうまきれぎれにやがて何にも聞こえなくなる

ことばは無力だろうか。沈黙の重さや意味以前の激しい叫びのほうが真実を伝えることがある。忿りや憎しみの感情は後からやってくる。目の前の空が暗転し全ての光景が大きく歪んで私を圧しつぶす。息ができない。人の内部ふかくに侵入する暴力の愚劣さをわたしは赦さない。ゲルニカの女たちの開きつばなしの口や目をわたしは思いだす。

満州事変以後、農村救済を目的とした移民政策で二十七万人が満州へと渡った。当時、「大陸の花嫁」などと喧伝されたいわゆる満蒙開拓団である。岐阜県黒川村でも村をあげて六五〇人余が入植した。

しかし、敗戦直前に対日参戦したソ連軍の侵攻に開拓民を守るはずの関東軍は何もせず真っ先に退散した。映画「黒川の女たち」はこの現地に残された黒川開拓団の歩んだ凄惨なドキュメンタリーである。五族協和の名の下に土地を家屋を収奪された中国民らの報復を怖れて、開拓団は敵であるソ連兵に庇護を求めた。そのソ連兵が開拓民の護衛の代償として求めたのが性接待である。

開拓団の古老は未婚女性十五人を昼夜分かつたソ連兵に差し出した。接待という名の性

暴力である。その管理を担ったのは開拓団の男性であった。激しい陵辱と性病の果てに四人が現地で亡くなった。しかし敗戦の翌年、性暴力の犠牲の上に帰国できた黒川村の人々の彼女たちに向ける誹謗中傷は激しかった。穢れた女性、恥の歴史として籍口令が敷かれた。それは二重の意味での死の宣告である。そして八十年、彼女たちはいまもう百歳に近い。あの事実をなかったことにはできない——という思いの強さが、実名と顔を公表して彼女たちに口を開かせたのだ。

当事者でもないわたしが軽々に語ることば慎まねばと思う。でも、語り部たちはやがていなくなる。その後を語り継ぐのはわたしたち世代だろう。今では、遺族会の人々も「彼女たちのお陰で無事に帰国することができた」と感謝する声は高い。ただ、「もう二度とこのようなことは起こさせない」と彼女たちに誓った男はいなかったように思う。批判しているのではない。そのひと言が誰の口からも出なかったことに俯くのだ。歴史から学ぶとは二度と繰り返させないとの老女たちに告げることから始まるのではないか。仮にそれが平時の覚悟に過ぎなかったとしても。

四 選 者 の 作 品

風すでに秋

平塚 千々和 久 幸

「老害」は聞き飽きたるよその昔「労咳」病みを恐れたりしが
氣を入れて読めばさしたる歌はなし かく評せしは幾度目なるか
戦争の代行をする国ありて狩られし兵士が死んだふりする
暇だから戦争しようとしたる戦いなれば終に有耶無耶
この人の意向に従うはかなし所詮は腐れ縁というべし
民法典七七〇条「配偶者に不貞な行為」は太てえ野郎とぞ
この町に住み十余年さはさあれシオカラトンボ見たることなし
どのような別れが待つているのか首筋にくる風すでに秋

傘さして

我孫子 丸山 三枝子

「梅雨寒」の幸子さんの筆しなやかにして力ある筆跡ながむ
草むらに夢見るように咲いているナガミヒナゲシ毒が少々
八月の街路に散りてオレンジの彩さわがしき凌霄花
なにがなし愁いたたえて紫のアザミ咲きおり辻堂のもと
買いきたる錆おとし抱え木洩れ日のまだらに揺れる道を帰りぬ
どのような会いや別れのありたるか駅前にくる鳩は二羽なり

外気温三十八度 傘さして駅のホームをわたしは歩く
友の解く相聞歌はもつまびらか話上手が後押しをして

抜け殻

東京 桜井京子

権翠と隠れ蓑の木となり合ひ或る日は喧嘩をするのだらうか
緑道の隠れ蓑の木盛んなり権翠の木は伐られるといふ
緑道をつやつや椿つやつやの実の三つ四つが弾けてゐたり
幼子がしばらく遊んで捨ててゆく蟬の抜け殻は永遠のぬけがら
夏のあさ木の葉が次つぎ降り来たりいつか一人になる時が来る
ラインにも電話にも応じぬ夏の夜の友あり何処かで祭りの音す
蟹になり甲羅に似せて穴を掘るけふのわたしは何にもしない
我が広島失速したり夏が来て「六甲おろし」を聞かされてゐる

カタカナ

横浜 渡辺礼比子

おそ夏の歩廊に立てるおみなごのワンピース美し風を孕みて
彼なりの丁寧語とぞ聞きたい「やつてもらつてもいいですか」
ガードレールに沿いて並べる花鉢に水やる人あり根岸二丁目
今にして思えば恋に恋をして失恋したる十八の秋

この人もあの人も死んだといいながら夫と見ている昭和のドラマ
わが裡の声にあらずや明け方の夢劈きて鳴けるカナカナ
頭の中をからっぽにせんと見はじめしドラマしきりに老いを嘲笑える
見てみてとライン電話に幼子がスキップしつつ部屋を過れり

作品一 十首選



(九月号作品から)

渡辺 礼比子 選

・閉店せし滝カバン店の傍らの空地の紫陽花が雨に濡れている

千々と久幸

解らないところはひとつもない。雰囲気のをさを読み取ればいい歌なのだ。「滝カバン店」という固有名詞については、ありそうな名前でありながら、多分実名ではないのだろうな、と思わせるところが心憎い。六、八、五、九、七音という字余りの調べから、なんとはなしに、湿度の高い梅雨時の空気が伝わってくるが、「空地」「紫陽花」「雨」など語頭の「あ」音の効果により、一首に仄かな明るさが漂っている。場面設定のよい、詩情豊かな趣のある一首と読んだ。雨のなかに雨ふりつく月曜日消えたファイルはまだ見つからず

丸山三枝子

「消えたファイル」とは、おそらくパソコンの中で作成したファイルのことだろう。往々にしてちよとした手違いで起こる出来事だが、作者にとっては、あんなに時間をかけて作ったファイルなのに残念なことこの上ない。焦燥に駆られて、何時間も探し回って溜息をついているところであろうか。「雨のなかに雨ふりつく」は想像力豊かな作者ならではの、イメージを形象化した表現といえよう。

時間的なものだけではない、繰り返し降る雨の鬱陶しき、暗い気分までが伝わるようだ。

・庭隅の、墨田の花火、の咲くあたり夕闇ほんのり青みていたり

伊藤美恵子

「墨田の花火」と呼ばれる種類の紫陽花があるらしい。この床しい名前が生きている一首である。薄青い花の咲く庭隅のひとつところに幻想的な世界を見つけ、それを「夕闇ほんのり青みていたり」と表現した。ともすれば、見逃してしまいそうな片陰に焦点を当てた、抒情性溢れる一首。

・パソコンの画面に大きな虹が出たごめんさいとすんなり言おう

伊藤 康子

パソコンのトップ画面が現れるときには唐突感があるものだ。画面が立ち上がったとたんに大きな虹があらわれ、そのちよとした刺激によつて、作者の気持ちが切り替わった。相手が誰なのかには触れられていないが、それまでは拘りがあつて、なかなか「ごめんさい」の一言が言えなかつたのに、この機会に謝ろうと決意する。きつときつかけはなんでもよかったのだと思う。

・人ならば百歳超えとふ獣医師に「お大事に」とて撫でられ息む

岩田 明美

主語は猫。猫は怒ったときに息んで体をふくらませることがある。猫にとつて獣医師はいたく苦手な存在なのに、なれなれしく撫でられたりしたら嬉しいはずはない。人間は自分たちの物差しで長寿を讃えたり、「お大事に」などと社交辞令をいったりするが、この猫さんは、風通しのよいところで「四肢と尾」を伸ばすのがお気に入り。のぼへミアンなのだ。猫からみれば人間など、自己満足のエゴイス

トにしか見えない。人間と猫の感情の齟齬がユーモアに描かれている。

・ 週明けに猛暑が来ると予報士が絹ごし豆腐のごとく言いたり

江口 絹代

これでもかこれでもかと過酷な天候が続いたこの夏、熱中症で病院へ運ばれる人も続出した。しかし、「猛暑」と聞いてうんざりはしても、もう誰も驚くことはなくなった。テレビにでてくる気象予報士も暑さを告げることに慣れっこになってしまひ、まるでスーパーで売っている豆腐のような、型にはまった、つるんとしたしゃべり方をしたのである。「絹ごし豆腐のごとく」という、直喩の独自性を目を見張った。

・ 映像のトランプさんに今朝もまた挨拶すれば噓が出たり

大井田 啓子

決して作者は「トランプさん」にフレンドリーな感情を抱いているわけではない。「挨拶」といいながら、「噓」がでるということとは、もしかしたらトランプブアレルギーに罹っているとも考えられる。とにかく毎日ニュースに登場し、世界を振り回している彼への痛烈なアイロニーが一首の核であろう。真正面から対象に切り込んでいくばかりではなく、脇から揶揄を入れる批判の方法もあるということに気づかせてくれた歌である。

・ 我孫子市に手賀沼課とふ部署ありて環境整備・浄化を担ふ

土井 紘二郎

事実をそのまま読み、何もよけいなものは足さないという姿勢の貫かれた歌。切り取りの良さがこの一首を支えている。市役所の部署といえば、すぐ思い浮かぶのが戸籍課、税務課、総務課などだが、

手賀沼課とはなんとも独自性に富んだネーミングである。手賀沼の浄化をモットーとしてそれだけ、住民の行楽や観光にも力を入れている市なのである。ちよつとした驚きとともに作者のユーモア精神が伝わる。

・ 暑くても食べなきや駄目よ新じやがが今年も友の気合伝へ来

西野 美智代

今年の連続的な猛暑は尋常ではない。そんな中食欲が衰えるのはしかたのないことだが、とりわけ闘病中の身には応える。元気でいるために食べなくてはいけないと解っているのに、食べ物が喉を通らないほど辛いことはない。だが、友だちとはありがたいもので、毎年、作者を思つて、新じやがとともに応援する気持ちを伝えてくれる。体力や気力が衰えた時、友のひとことはどれだけ力をくれるかしない。

・ ネットには様々なレシピあふれて母の味など消えてゆくなり

満木 好美

一昔前の主婦であれば、料理は母親や姑に教わるか、あるいは料理本を手にして少しずつレパートリーを増やし、腕をあげていったものだ。しかし今やインターネットサイトで料理のレシピを検索すれば、ひとつの料理について、何十種類もの作り方が写真つき、場合によっては動画つきで公開されており、便利なことこの上ない。ネットの料理サイトをきっかけに家庭内で料理にかかわる男性の数が増えたという話も聞く。それはそれで結構なことだ。しかし母としては、これだけは伝えたいとおもっている「おふくろの味」に、わが娘や息子が関心を示してくれないのは、何やら寂しいことではある。

作品二、三 十首選



(九月号作品から)

千々和 久 幸 選

〈作品二〉

・待つという時間もいつしか好きになりまだまだ夢を追いかけてい
る

会沢 ミツイ

一日の生活が時間通りに滞りなく推移する、というのは稀である。作者が時間に厳しければ厳しいほど、結果的に待たされることがしばしば。だがこの作者は待つことに焦れたり、不快感を募らせたりはしない。なぜなら一見無駄に見える待ち時間を、自分の夢を追う豊かな時間に変えることが出来るからだ。

人生の最大の課題は退屈しないことだが、この作者の後半生は、きつと美しく豊かな時間が待っているだろう。

・突風に転んで夫は歯を折りぬサスペンスドラマは歯科医で終わる

竹本 幸子

作者の心づもりではドラマは結句でジ・エンドだが、夫が主演のドラマなら、作者もエンド・ロールまで共演が求められよう。何にせよ主人公と歯科医の悪戦苦闘、波瀾万丈のドラマ(?)の第二部がこれから始まるのだから、賢夫人は脇役を務めねばなるまい。

それを「おっ、サスペンス！」などと手を叩いて喜んでいうようでは(むろん演技)詩的誇張でしょうが!) 良妻賢母の名が泣きま

しょう。悪役の突風は不可抗力、夫に罪はないというのは、評者が類似の経験をしたための依怙臆員である。

・夜半の雨降りやまぬなり 馬場あき子歌は向こうからくると言い
たる

中井 房江

馬場センセーほどの歌詠みが、何と人騒がせで無責任なことを言うものですかね。わたしども素人はこれにコロリ騙されるんですから、とても「香蘭」の選者なんかやつてられませんよ! 嘘だと思
う向きはマルヤマ先生か、サクライ先生に聞いてご覧なさい。

有り様は、興が乗れば(ここが肝要!)、「あやしうこそもの狂ほ
しけれ」(徒然草)で歌が噴出する、ってことでありましょう。手前
どもは「下手な鉄砲も数打てば当たる」方を推奨しております、あ
らあかしこ。

・いつもよりおめかしをしてランチブッフエ サラダの豆が弾んで
いたり

藤田 祐恵

「いつもよりおめかしをして」いるのは、作者とも「サラダ豆」と
も読める。作者の狙いは前者だろうが、後者も含めて読んだ方が歌
としては面白味が増そう。

・鈍色の時よりぬけて大空の碧き彼方へわれを放てる

安田 恵子

一見、理屈っぽく見える歌だが、内容は平易かつ明解。いわば自
己の精神の充電と放電のメカニズムを、現下の心境に即して詩の高
みに打ち上げたという構図。

図式的に言えば鬱屈から解放へ、不如意の時が歓喜の時へ移行す
る刹那を色彩的に捉えたもの。よく解る作品だが、理が勝っている

ため入り口が見え難いという受け止め方もありましょう。

・一番の素敵なところをまづは見る女性に会ふと恋してしまふ

山下 紘正

フランスでは男性が女性に出逢うとまず口説く、というのがエチケツトだそう。真偽はさておき、わたしはフランスで生まれなくてよかった。心にもないことを(?)口にするなんてオトコの風上に置けぬ、と。

ところでこの歌、女性と会えば「一番素敵なところ」を見ろというの、紳士たるべき者の最低限のマナー。それを「恋してしまふ」というのは詩的誇張で、平たく言えば「恋してしまふ」ほどの目で見詰めるという思い遣りだろう。さすればフェミニズムだのジェンダーだのと余計な議論をしなくて済もう。

とは言え素敵な女性と出会った時、見詰めるどころかドギマギするのがわれら田舎者の常。汝、安んじて恋せよ。

・石段の隅に集まる花びらは春の名残を明るくとどむ

脇谷 房子

読者に負担を掛けない軽妙な詠い口で、一読して好感の持てる歌。どことなく作者の謙虚な人柄も窺えるところがいい。四句は内匠頭の「春の名残をいかにとやせん」を思い出させるが、結句の透明感がそれを凌駕している。

《作品三》

・今日は雨やつぱり雨っていいものだとしや降りするなと空を見上げる
柏原 貞雄

思いの丈を全開した開放感が、一首をモノローグ(独白)に終わ

らせなかった。そう言われても空だつてコマルのだが、こう激励されつつまづてはねえ。

・青嵐ふき抜けてゆく窓の外うたた寝をする片方の男 かたえ

川久保百子

：で作者はこの光景の何処に興味を引かれ、何を訴えたかったのだろう。上句の把握が大掴みだから事実を提示されても「膝ポン」とはいかない。「神は細部に宿る」という言い古された評を思い出す。明らかに作者の戦略ミス、と言わねばならない。もつと踏み込まないと、これでは傍観で終る。

・老いたりと歎けどされどこの年で出会えたものもいくつかはある

小城 勝相

歳を取ると不都合なことが多いが、この歳でなければ出会えなかったものもある、と自らを励ます歌。はてさて、ならばその新しい出会いとは何だろう。読者は色々想像を巡らす、肝腎のブラック・ボックスを覗くことは出来なかった。そこを直截に詠って欲しかった。いや詠うべきだった。

・エアコンの洗浄終れば真黒な汚水に心も洗われる心地

大原原良子

一読、うーんと思わず唸った。意地悪な読み方をすれば「汚水に心も洗われる」とはいったいどんな状態か。エアコンならともかく、汚水に心身を洗われたのはいよいよ汚れるのではないか。

この場合、二句以下は「真水にて心身の汚れ洗い落せり(さん)」とでもせねば、作者の意図が通じまい。作者の意識に混乱はあるまいが、言葉とはかく厄介で悩ましいものだ。

村野次郎への旅（187）

昭和期の「香蘭」（二十二）

千々和久幸

今月から「香蘭」第五卷第十二號、昭和二年十二月一日（1927）年十二月號（昭和二年十二月一日發行）を読むことにする。

例によって目次から見えていこう。表紙畫及び題字の森田恒友は変わらない。最初の短歌欄には次の十二名が出詠。村野次郎、酒井廣治、橋本敏夫、本間樂寛、南部松若丸、芥子澤新之介、眞島勝郎、杉浦翠子、次いで矢代東村の随想「準町雜記」、そして第二短歌欄には以下の十二名が出詠。成田憲三、西村孝、松丸魁一郎、住吉良康、日根淳吉、神合葛三、若林昇、庚申薫、遠藤正人、杉本喜一、森田定子、岡田和子、さらに前月歌壇合評は杉浦翠子、冬野木枯、南部松若丸、橋本敏夫。

さらに極月集に大貫迪子など十四名が出詠。香蘭合評會を挟んで薄氷集（杉浦翠子選）に前田健太郎など十九名が出詠、冬籠集（酒井廣治選）に松本健吉など二十二名、十二月歌

卷（筏井嘉一選）に二十一名、夜雨集（村野次郎選）に二十名が出詠。

付記すれば後に、編輯人、顧問となる神山裕一は夜雨集に名前が見える。

作品欄の後は壺中の天地、歌會記事、編輯後記（村野次郎）となっている。巻頭の村野次郎作品から読んでいこう。

壺の實

村野次郎

① 野分吹きてさむき夕日に軒の巢の熊蜂黒くかたまりにけり（或田舎の葬式にて）

② 田舎人の述ぶる悔みはねんごろなり土間にしつどふ人のともしさ

③ 藁草履素足にはきて葬式を送ると庭の土ふみにけり

④ 葬式を庭に待つ間のわびしさや帽子に落ち來るどんぐり一つ

⑤ あら繩を握りずり下す棺の重みあやふく堪

ふる赤土ふみて（畑の墓地）

⑥ 底深く納めし棺の白き上こぼれ落ちたる畑のあら土

「或田舎の葬式にて」とわざわざ注釈がある通り、これは先生の身内の葬儀ではないことは読めば解る。ここでは如何にも昭和初期らしい田舎の葬儀風景を理解して頂ければ、一連の歌を読んだ意義がある。

②の歌の結句「ともしさ」は分かり難い。辞書には「ともし」は、「乏し」が語源で「不十分である、不足している」の意。そう理解しても尚、一首の理解には曖昧さが残ろう。もともと「ともし」が曖昧さを含んだ言葉だから。ここでは会葬者の心許なさ、悔しさとも言うほかはない。

⑤、⑥は納棺の事実を述べたもので、予め掘られた穴に棺をおさめる状態が詠われている。わたしは祖父母の遺体を埋葬する場に立ち会ったので、よく解る。

この場合、縁もゆかりもない近くの子供達が墓穴のまわりに集まって、埋葬の始終を見に来るのである。追い払う訳にも行かず、わたしは子供心に遣り切れない思いをしたこと

を覚えてゐる。

埋葬場所には後に石碑を建て、お盆になると石碑の前に竹で花筒を作り、線香と共に花を手向けた。

さて前月歌壇合評を見ておこう。評者は杉浦翠子、冬野木枯、南部松若丸、橋本敏夫である。

短歌雑誌

水道橋界隈

半田 良平

おりたちて我も驚きぬ郊外より運ばれて来しこの人の群れよ

あらそひてここにおり立つ人見れば今日のつとめを皆もてるらし

(松若丸) 氏の新しい努力をなさることは誠に涙ぐましいことである。一、二の歌の説明に役立つ以上のものを認め得ない。第二句のものと結句のよとは共に不用意に用ひられてゐる。

二、見れば、もてゐるらしはこの歌の価値を半減してゐる。

(木枯) 合評に引張り出される歌は、誰の歌にせよ、いつも結構なのが無いから、悪口許り並べる様になつて心持がよくない。この二作御他分に洩れず感心したとは申されない。半

田氏作と銘を打つことは、氏の面目にはならない様だ。この歌の意味はわからない事が多いが、こんな歌を作つて見たくなる感動は、どんな場合に起こつてくるかを疑念とするのである。讀者に強い響きを與へないのは歌が下手であるか、材料がわるい爲か。或は両方であらう。この歌の如きは、技巧、取材平凡であると思はれる。もつとも、日記帳の端に書きつけておくのなら、これ位のものでかまはないかもしれない。(この人の群れよ) なんてあたりの、なま半分な詩人口調は、どうも好ましくない。こんなつまらなうな境地で相當に生命をふきこんだ歌に仕上げる力腕があつてこそ、大家といふべきものであらう。

半田先生よ。如何に。

ポトナム

阿夫利山頂

阿部 静枝

遠向ふ雲間の富士やその裾に明日はいゆか
んわが旅路なり

山に來れば山の愛しく旅にして吾はうつし
よをゆたかにおもふ

(敏夫) (一)「遠向ふ」は富士に對して自分が遠くから向つてゐるのであらうが、「雲間の富士」に對して妥當かどうか。「雲間の富士」

雲と雪との間に見えてゐる富士か、又は雲間がくれないと云ふ風に雲に隠れてゐるそれか、後者なら、それを「や」で受けるのはいい。のみならず、直下に「その裾に」と云つて、「わが旅路なり」と結ぶ爲にも之「や」は違法である。一首全體としては餘り澤山の事柄を述べ過ぎて不統一である。「わが旅路なり」に餘韻餘情を持たしたのであらうけれども。

(二) 歌ひ過ぎて混亂してゐる。

(松若丸) 一、凝滞した感情と無味なる表現以外更に論ずる處なし。

二、個性を表はさむとしてゐられるがそれは餘りに概念的なる表現によつて失敗に歸している。

この欄は毎号楽しみに拝読しているが、いずれもなかなか手厳しい批評である。それは長所を見るより先に、欠点を扶することに急であるように見えるからである。

当時の「香蘭」の作歌修業がこのような厳しさの中で実践されてゐたのかどうかは、いま少し読み進んでから考えてみたい。世に「眼高手低」という言葉もあり、悩ましい問題である。

新聞にもの中す

威勢のいいタイトルをつけたが、ここでも朝日新聞の編集方針に異議申し立てをしようという訳ではない。わたしが現在購読しているのは朝日新聞だが、こんな見出しに出会ったからだ。

「自民党四役が辞意 首相は統投姿勢」(25年9月3日、朝刊一面トップに)とあった。わたしにとっては「ん?」とも「またか」とも、である。

意地悪く言えば「なぬ?」この国の首相たる石破茂は野球のピッチャーなのか」という疑問である。また翌9月4日の同紙3面には「連合・芳野会長統投へ」とある。コチラも「統投」である

こうなるとこの表現が野球の話題でないことは明らかである。これは石破、芳野両氏が「引き続き現職に止まる」ことを意味していることは言うまでもない。

ならばなぜ政治の世界の出来事を、わざわざ野球用語で表現せねばならぬのか、である。それはその方が解り易い、あるいは新聞の慣例的表現だからである。

ついでに今ひとつ、9月3日の同紙の夕刊の一面の左側は「中口朝首脳 そろい踏み」とあった。これだって「ん、なぬ?」の類いである。「そろい踏み」は相撲界の用語で、本来の意味は「相撲で、

力士が土俵上に並び、正面に向かって揃って四股を踏むこと」である。

左記の見出しをもつ記事は「中国軍事パレード」を報じたもので、記事の概要は左記の通りである。

中国の習近平指導部は3日、抗日戦争(日中戦争)の勝利から80年を記念する式典を北京の天安門広場で開いた。(中略)式典にはウクライナ侵攻後も中国と良好な関係を保つロシアのプーチン大統領の他、対中関係の冷え込みが指摘されてきた北朝鮮の金正恩総書記が出席。中口朝の3首脳(中略)は天安門の楼上に並び立ち、米国をにらんだ対抗軸を印象づける形となった。

これが「中口朝首脳 そろい踏み」という見出しの根拠である。何も習近平、プーチン、金正恩の三人が天安門広場で四股を踏んだわけではない。つまりコチラは相撲界の用語を新聞記事に焼き直したものである。一方は野球界、コチラは相撲界の表現を拝借したまでのことで、解りにくさや読者に不都合がある訳ではない。

だがわたしが言いたいのは、新聞記者たるもの新聞らしい「もつと斬新な表現が出来ないものか」、ということである。これではボキャ貧と言われても仕方があるまい。解り易いことは当然だが、十年一日のごとくヨソ様の言葉を拝借しては新聞記者の名が泣かう。今少し言葉に神経を尖らせて、斬ったら血の出るような表現を考案して欲しいと切望する。

なぜって、わたしは表現の多くを新聞に学んでいるのだから。

一頁公論

(54)

『鎌倉百人一首を歩く』鑑賞

石川 詔子

鎌倉香蘭の歌会の後、香山静子先生は、駅前のカトレアビルにある鎌倉館という喫茶店に、時々連れて行って下さいました。短歌を始めて間もない頃でしたが、私はその店の壁に貼られている歌の色紙に惹かれました。

・春浅き沖の遠くに一束の光を置きて海翳りたり
尾崎左永子

この歌の作者の尾崎左永子という歌人について、こんな本もあるのよと先生が紹介してくださり、『鎌倉百人一首を歩く』を読み始めました。

本の中の百人一首八十八番目には元香蘭選者の大貫迪子先生の歌もありました。

・赤鳥居人呼ぶからに朱の塗りの三の鳥居をわが仰ぎみつ
大貫迪子

源頼朝の作った鳥居は木、徳川幕府の作っ

た鳥居は岡山県犬島の花崗岩、関東大震災の後に作られたものは、コンクリートです。犬島の花崗岩で作られた手水鉢は、今も八幡宮に残っております。赤く化粧直された頃の三の鳥居はさぞ美しかったことでしょう。

ちなみに大貫迪子選者の後を香山静子、渡辺礼比子、高島憲子の各選者が引き継ぎ、香蘭鎌倉支部は、今も活発に活動しています。

以下に『鎌倉百人一首』に掲載されているその他の感銘歌を抄出してみます。

・風になびく富士のけぶりの空に消えてゆく
へもしらぬわが思ひかな

西行『新古今集』

この歌からすると、鎌倉時代の富士山は煙を出していたようです。西行は大磯にて「ころなき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮れ」と歌っています。「吾妻鑑」によれば、奥州に向かった西行は、大磯、江の島、鎌倉に立ち寄り、頼朝と会っています。

・知らざりし浦山風も梅が香は都に似たる春のあけほの
阿仏尼『十六夜日記』

阿仏尼の墓は英勝寺のやぐらにあり、六層の堂々とした石塔です。

・大海の磯もとどろに寄する波われて碎けて

さけて散るかも 源実朝『金塊和歌集』

・人丸ののちの歌よみは誰かあらん征夷大將軍みなとの実朝 正岡子規『竹乃里歌』

柿本人麻呂に次ぐ歌人は実朝であると子規はうたっています。実朝の歌は私でさえも暗記しています。毎年暑い八月に、鎌倉八幡宮の直会殿で実朝祭短歌大会が催されています。

・病舎より水平線みゆ生活にかかはりもたぬ
その平明よ 滝沢亘『断腸歌集』

海に沿い由比ヶ浜、七里ヶ浜、腰越には、サナトリウムが建っていたようです。結核で療養する方が多かったのでしょうか。

江ノ電が七里ガ浜駅から腰越駅に向かう車窓には美しい景色が広がっています。「天国と地獄」、「スラムダンク」という映画のロケ地でもあり、なぜか何時も賑わっています。

・この坂のまがり方かな朝比奈宗源は左手を小さくあげたり

高瀬一誌『すみれ幼稚園』

作者は短歌人の編集人を務めていましたが二〇〇二年に逝去し、円覚寺に眠っています。

『鎌倉百人一首』の歌を心躍らせて読みました。日頃は香蘭誌の歌をじっくり読んで勉強しています。短歌は楽しいです。